



江戸座敷
からくり人形展

手動からくり

からくり御所人形

(オリジナル) 高さ 22cm



からくり御所人形、人形の背中にネジを差込んで回すと手に持った面をかぶる。御所人形は江戸時代に創作された3頭身の幼児の人形。「御所」の名がついているのは、京都の御所や公家から大名の献上品に対する返礼としてこの人形が贈られたことからの由来とする。

からくり根付「殻つき雛」

(オリジナル) 高さ 3.3cm

振ると、割れかけた卵から顔を出した雛が動く。大野弁吉の作と思われる「殻つき雛」が現存している。

幕末から明治初期にかけて活躍し、名をはせた大阪の根付師に大原光廣がいるが、この「殻つき雛」がその光廣の作であるかどうかは定かでない。



エレキテル(複製)

高さ 21.5cm



エレキテルは江戸時代にヨーロッパから渡来し医療器具として使われた。エレキテルの仕組みは大別して2種類ある。

水からくり

自動噴水器 (複製)

高さ 49cm



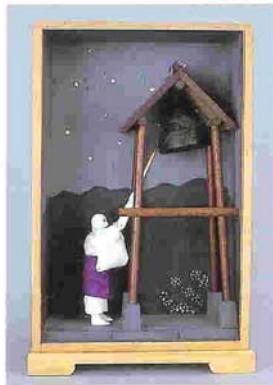
ヨーロッパから渡来した一種の噴水装置。オランダ人を通じて得たヨーロッパの知識をまとめた「紅色雑話」(1787年刊)という本に『コンストホンテイン』と紹介されている。上部の水盤に水を注げば水圧と空気圧のはたらきにより水盤中央のノズルより水が噴出される。



砂からくり

元禄鐘打ち人形

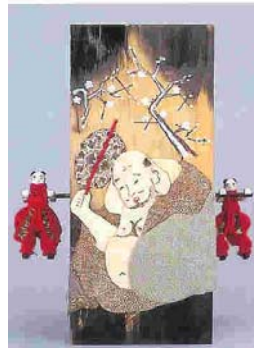
(複製) 高さ 32cm



僧侶が鐘をたたく。日本庭園に見られる「ししおどし」の原理で水の代わりに砂を用いている。

布袋と唐子

(複製) 高さ 28.5cm



箱の上部に漏斗がついており落ちる砂を羽根車が受け、水車の原理で回転させ箱の左右に伸びた棒にぶらさがった唐子を動かす。

鞆鞆 (しゅうせん)

(複製) 高さ 36cm

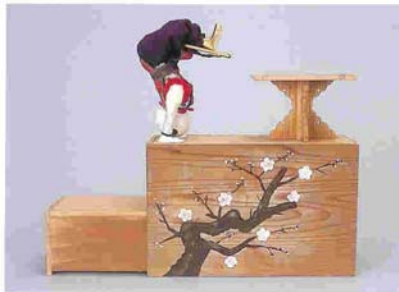


鞆鞆とはブランコのこと。桜の枝にぶらさがった唐子が枝を中心として回転する。仕組みは、「布袋と唐子」と同じ。

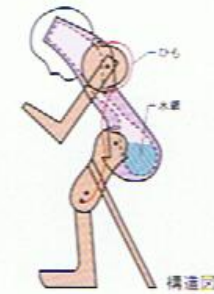
水銀からくり

段返り人形(複製)

高さ 22cm



階段に手をついた人形が、とんぼ返りをしながら、下へ下へと降りて行くからくり。人形内部の首から胴にかけて、ちょうど砂時計のような形をした空洞があり、そこに水銀が仕込まれている。上にある水銀がした下方へ少しずつ移動することで、重心の移動が起きる。それにつれて人形が手を上げ、体をそり返らせるようにしてあるため、とんぼをきることができる。

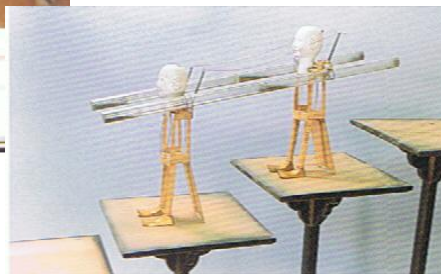


連理返り(複製)

高さ 22cm



人形が両肩に担いだ棒を軸にして、交互に相手を飛び越えながら、階段を下りていくからくり。段返り人形の手足の位置に、それぞれの人形を配したと思えば、原理がわかりやすいと思う。



水銀を入れた棒を透明アクリルで作った模型で、棒の中間に仕切りがあり、仕切りの上と下に穴が空いていて、水銀がスムーズに流れるようになっている。

ゼンマイからくり

茶運び人形(複製)

高さ 41cm



江戸時代のからくり人形としては、もっともよく知られ、井原西鶴(1642-93)は彼の句集「独吟百韻」に「茶運ぶ人形の車はたらきて」の句を残している。茶たくに湯呑みをのせると、人形は前進を始め、一定の距離を動いた後、自動的にユーターンする。動いている間に湯呑みを取ると、人形はそこでストップするから客は適当なところで湯呑みを取り、お茶を飲んで戻すことで、人形はお茶の給仕ができる。

花車型盃台(複製)

高さ 10.5cm



盃をのせると動き出し、取れば止まるからくり。部品は全て真鍮。加賀国石川郡大野村(現在の石川県金沢市大野町)に幕末から明治初期にかけて多くのからくりを作った中村屋弁吉、通称、大野弁吉(1801-1870)の作と思われる。

七妖品玉人形(オリジナル)

高さ 46cm



「品玉」は手品のこと。人形が伏せた枱を上下させるたびに、枱の中身が変化する。これは七つに変化する。動力は鯨のヒゲのゼンマイ。

ゼンマイからくり

弓曳童子 (複製)

高さ 54cm



《弓曳童子の動き》

- ①顔を傾け、矢立の矢へ右手を伸ばす。
- ②矢を指ではさみ、持ち上げながら顔をあげる。
(この瞬間に扇形の矢立が回転し、新しい矢が人形の手の届く位置にセットされる)
- ③顔を的の方向へ向け、弓に矢をつがえる。
- ④左手で弓を押し、右手はそのままの位置に保たれる。
結果的に弓は曳き絞られる。
- ⑤顔を弓矢に近づけ狙いを定める。
- ⑥矢を放ち、顔をあげ、元に戻る。

弓曳童子は、田中久重が残した「からくり考案図」の中に描かれていたが実物の存在は長い間おおよそには確認されていなかった。

しかし、1989年10月、江戸からくりの収集家・研究家の東野進氏が、考案図とほぼ同じ人形を発見し購入。東野氏の依頼を受けて、動かなくなっていた人形を修理し甦らせたのが、峰崎十五氏だった。

東野氏はさらにもう1台、やや意匠の異なる弓曳童子を発見し、これも峰崎十五氏によって修理された。

弓曳童子の存在が確認されたことで新たに2台のからくり人形に光が当たる。1台は尾張藩の鋳物師頭を代々務めた水野家に伝わる「那須与一」と呼ばれる人形。もう1台はイギリス・ロンドンのオートマタ収集家・骨董家のジャック・ドノバンが所有していた。

田中久重の経歴

優れた発明家で、日本の近代エンジニアの先駆者。江戸後期から明治初期まで活躍し、東芝の前身の田中製造所を設立。寛政11年(1799)、筑後の国(福岡県久留米市)に生まれ、幼名は儀右衛門。

14歳で早くも久留米緋の織機改良に才能を発揮。16歳の時、地元の祭礼で自作の水からくり人形を実演して人々を驚かせ、「からくり儀右衛門」と称される。

25歳で、大坂道頓堀でのからくり興行を成功させ、35歳で大坂に移住。その後、京都に移り機巧堂を開店。50歳の時、嵯峨御所から近江大掾の位を授かった時から田中近江久重となる。76歳で東京銀座に田中製造所を開業。82歳で没。その後、事業は芝浦製作所が継承。



